梧桐会総会開催

5月8日(日) 於・大崎高校

梧桐会報

第51号

平成17年4月1日発行
発行所
梧桐会
事務局・東京都大田区新蒲田
3-18-1-507　渡部良彦方
TEL/FAX　03(3730)8117

編集人　渡部良彦
発行人　川村治
印刷所　日正印刷㈱

ご挨拶

都立大崎高等学校長
齊藤光一

梧桐会の皆さん今日は。昨年の四月に本校に着任して、早くも一年か経過しました。

昨年のご挨拶では「九十余年の伝統のある大崎高校をより一層発展させるべく、梧桐会、PTAの皆様のお力もお借りし、教職員とともに一丸となって努力していく所存でございます」と決意を表明いたしました。

この決意は今年度も変わりません。皆様、よろしくお願いいたします。

私は、今年度の入学式に新入生の皆さんに、次のような話をしました。

「人は一人一人それぞれに違いがあり、それゆえに尊い存在なのです。自分だけにしかない素晴らしさを、皆さん一人一人が本校の三年間で発見してくれることを願っています。

そこで、私は、皆さんに三つのことをお願いします。

まず、日々の授業を大切にして、本校の三年間で確かな学力をつけてほしいのです。次に、思い切り部活動、生徒会活動、委員会活動に参加して、心身ともに逞しくなってほしいのです。

最後に、皆さんの先輩方が築いた自主・自律の校風を、皆さんがしっかりと継承してほしいと願っています。

世界にたった一人しかいない自分。その自分を信じ、その良さを本校の三年間で十分伸ばしてほしいのです。皆さんにはそれができると信じています。」

実は、昨年度の入学式でも同じ趣旨の話をしました。新入生の皆さんも、卒業後には梧桐会の会員となっていきます、若い会員の方々にも皆さんの後をしっかりと継いでほしいとの願いを込めて式辞でも必ず触れるようにしています。

本校の近況ですが、都道の工事は相変わらず進行中です。

今後のテニスコートの完成や、校舎裏のささやかな庭の整備完了を楽しみに待っています。

昨年度、学習面では、進路希望の実現に向けて三年生が頑張ってくれました。

また、体育祭や文化祭などの学校行事も、数年前に比べて実行委員会が自主的に活動するようになり、伝統の自主・自律の精神が発揮されるようになってきました。

皆様の母校大崎高校が、より発展できますよう頑張って参ります。

今後とも梧桐会の皆様の温かいご支援を賜りますようお願いいたします。

ご挨拶

梧桐会 会長
川村治

東京の周辺では桜の花も見頃を過ぎ、若葉の緑が一段と眼に染みる季節と成ってまいりましたが、梧桐会会員の皆様方には如何お過ごしでしょうか。日頃より同窓会の活動に対し、深い御理解と御協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

平成十七年三月を過ぎ、今年も二七八名の卒業生が新しい梧桐会員として入会をされ今日では一八〇〇〇名を超える多人数の組織へと成長して参りました。そして各々の会員の方々が社会の広い分野にて、大いにご活躍をされている事と存じます。

同窓会「梧桐会」はご承知は通り、会員相互の親睦交流と、併せて母校の発展に寄与する事を目的として、昭和十二年に設立をされ、今年で六十八年目を迎える事となりました。

同窓会の活動につきましては、第一に会報の発行が有りますが、年一回の発行を目指し、渡部副会長を中心として幹事の方々が忙しい仕事や学業の合間をぬって、掲載原稿の依頼や特集記事の企画編集等に大変頑張ってもらっております。

第二に総会の開催が有りますが、本年も五月八日(日)母の日に、大崎高校内光の庭にて開催すべく、幹事長や若い幹事の方達が準備を進めている処ですので、会員の皆様方には、どうぞ同級・同期お誘い合わせのうえ、多数ご出席下さいますようお待ち申し上げております。

このところ毎年ご寄付のお願いを致しており、誠に心苦しい事ではございますが、梧桐会の運営費用は、新入会員から戴くお一人七千円の終身会費でまかなっております。従って、会員数は毎年増加しますが入金額はほぼ一定となり、会報発行数の増加に伴って、郵送料も増え続ける訳で有ります。総会に掛ける費用の削減を、幹事一人々々が準備、手助けをしてもらう事で計るなど知恵を出しながら企画をしているのが原状です。このところ数年、若い幹事の参加が増えて参りましたので新しい発想も取り入れながら梧桐会の活性化を進めて参りたいと思っております。

同窓会に対するご意見・ご要望・お考えを是非お聞かせ頂きたく、FAXかメールにて事務局までお寄せ頂ければ幸いです。

進路指導室より

進路指導部　常国佳久

増え続けるフリーター、少子高齢化など、日本社会の変貌がじわじわと高校生の進路にも影を落としつつある中で、本校生は全体として健闘してくれたと思います。

本年度の卒業生の進路状況を個々に見ると、少しずつですが受験大学・短大の拡散化が見られます。合格した大学の延べ数、合格した延べ人数ともに増加しました。推薦で早めに進路を決めたいという志向も見えます。その中で国立大の合格者が途切れたのは残念でした。専門学校進学者数も昨年同様の結果を維持していますが、推薦で決めたいという傾向は強いようです。

就職に関しては求人数は増加に転じていますが、高校生の希望する事務系の求人はやはりぐっと減り、厳しい状況です。学校斡旋による就職者は七名で、本校生を採用したある社長さんが「今の時代にこんなすばらしい生徒がいることに心打たれた。」とおっしゃったことが忘れられません。公務員合格者はなしでした。

今年度も進路指導部一同、生徒一人一人に対して次のような支援体制を維持してゆく所存です。すなわち、希望を高く持たせる、日々の地道な努力を積み重ねさせる、現実を見据えた生きる力を身に着けさせるなどです。こういう時代であればこそ、本校の「自己実現」、「自己完成」を中心に据える伝統は、ますます輝きを増してくると信じています。どうか諸先輩方、後輩のために今後もどうぞご支援をよろしくお願いいたします。

平成十六年度卒業生 進学状況（4月1日現在）

進学

四年制大学合格者数

麻布 1　亜細亜 2
桜美林 4　大妻女子 1
大阪電気通信 1
学習院 1　京都精華 2
神奈川 5　関東学院 13
杏林 1　國學院 1
国士舘 7　駒澤 2
駒沢女子 2　淑徳 1
松蔭 1　城西国際 1
城西 1　湘南工科 4
昭和女子 2　女子栄養 1
駿河台 1　聖徳 1
専修 1　創価 3
第一薬科 2　大正 3
大東文化 6　高千穂 1
拓殖 2　千葉工業 1
千葉商科 1　鶴見 2
帝京 2　天理 1
東海 4　東京工芸 1
東京農業 1　東京家政 1
東京経済 2　東京工科 1
東京工芸 1　東京成徳 1
東京純心女子 1
東京女学館 1
東京電気 2　東京富士 4
東邦 1　東洋 3
二松学舎 1　日本 7
武蔵工 1　武蔵野 1
文化女子 1　文教学院 1
法政 1　明海 2
明治学院 4　明治 1
明星 5　目白 4
横浜商科 1　立教 1
立正 10　和光 4
和洋女子 1

短期大学合格者数

青山学院女子 1
跡見学園女子 1
カリタス 2
川崎市立看護 1
駒澤 2　昭和女子 1
洗足学園 1　鶴見大 3
帝京大 1　産能 2
実践女子 1　淑徳大 1
淑徳 1　聖徳大 1
鶴見大 1　戸板女子 3
東海大 2　東京成徳 4
東京女子体育 1
東京家政学院大 1
東京田中 1　東京農大 1
東京立正 2
東横学園女子 1
文化女子大 1
文京学院 1
文教大女子 1
山野美容 1　山脇学園 1
横浜美術 1
専門学校合計 90

就職

山愛 1　JR東海 1
タナカ 1　ティノラス 1
ビジネスサポートセンター 1
ファイブフォックス 1
マツモトキヨシ 1

教職員の転退

転出

山口博士（国語）東高校
山本一彦（国語）杉並高校
大塚宏二（日本史）三田高校
石井雅洋（世界史・地理）八丈高校
永野恒雄（倫理）南多摩高校（定）
青嵜百合雄（数学）世田谷工業高校（定）

転入

森本吉一（国語）八潮高校
小島弘之（国語）南高校
宮澤健治（日本史）農芸高校
三好喜輝（世界史）芝商業高校
宮田利一（地理）足立東高校
宮岡早苗（数学）砧工業高校
今泉久美子（化学）青井高校
朝倉知子（保体）井草高校
今橋智子（英語）芝商業高校
大山秀海（英語）新規採用
田中秀子（被服）八丈高校
松本恵司（事務長）神津高校
鈴木佐衣子（事務）新規採用
平山美智子（化学）小山台高校
涌井純子（保体）一橋高校（昼夜間）
宮田智子（英語）日比谷高校
吉田博子（被服）松が谷高校
美濃又清志（事務長）国際高校
秋田正樹（事務）六郷工科高校
合澤綾子（事務）松原高校

退職

五十野晴子（英語）南多摩高校（嘱託）

日時　5月8日（日）母の日
12時30分（受付開始）
13時～16時
会費　2,000円（新卒者 無料）
プログラム　会長の挨拶
学校長の挨拶
その他

昨年の同窓会から

戦後の高校生活

三原　洵（昭和27年度卒）

私は昭和27年3月に総勢180名と共に本校を卒業しました。旧満州国からの引揚者で、家庭の事情で福岡市から東京都内の荏原に転居しましたので2年生として編入しました。当時は終戦後の混乱期で就職難と極端な物資不足で、どの家庭も貧しい生活を強いられていました。在学中は緒方校長・坪田・高砂・田島・芳賀沼・浜田の諸先生方に大変お世話になりました。

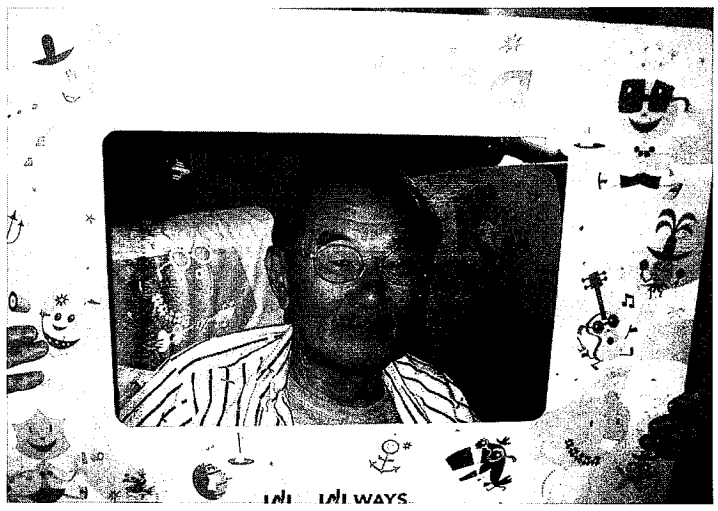
今でも忘れ難いのは田島先生から「人生老い易く学成り難し」と力強く筆で書かれた色紙をいただいたことです。これを座右の銘として一所懸命、勉学に励んだことで1浪後、辛うじて横浜国立大学工学部の応用化学科に合格することが出来ました。この時の感激は今でも忘れられません。なお坪田先生は今もご健在で、私が数学を好きになる糸口をつくっていただきました。戦時中は学業も身につかない状態でしたので、本校で教育を受けたことが私のその後の人生の基盤となりました。

本校は皆様ご存じのように前身が女子校であったことから、当時の男子生徒は僅か20名たらずでした。多くの親切で美しい女子生徒に囲まれて、夢のような楽しい学園生活を送ることができました。また逆に少人数であるが故に男同士の絆も非常に強く、今でも当時の同級生の殆どと年賀状のやりとりを続けております。なかでも税理事務所を自営しておられる小沢啓一税理士には今でも大変お世話になっております。しかし、平均寿命に近づいたこの年(73才)になると同期生が次第に欠けていくのは誠に寂しい限りです。

私は長らく仕事の関係で姫路市と神戸市に住んでおりましたので、梧桐会と疎遠になっておりました。しかし昨年、川崎市に転居して母校とも非常に近くなりましたので、これからは梧桐会主催の行事にはできるだけ参加させていただきたいと考えております。

約45年間に及ぶ長いサラリーマン生活を終えて3年前に自営の会社を立ち上げて現在、忙しい毎日を送っております。仕事の合間に旅行などを楽しんで日頃のストレスを発散させて、健康である間は仕事を続けたいと思っております。

最近の都立大崎高校は有名校への進学率も年々高まっており、これからの益々のご発展を心からお祈りして筆を置きます。



会員だより

卓球部の思い出

赤尾（井上）幸代（昭和56年度卒）

大崎高校を卒業し、早二十三年がたちました。現在は、大分県で、公立小学校の教員をしております。全校児童十六名と言う、山の中の小さな小さな学校です。

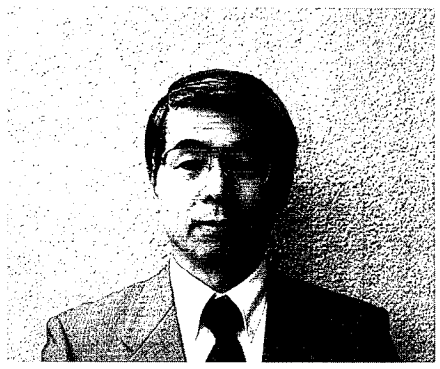
夕方になると、かわいいタヌキが運動場を訪れます。また、毎年、春になるとミミズクの仲間の「アオハズク」という鳥が、運動場の木にある巣にやってきて、卵を産み、子育てをします。こんな、素晴らしい自然に囲まれた学校です。

都会の方々には、想像もつかないかもしれませんが、一年生二人、二・三年生の複式学級五人、四・五年生の複式学級七人、六年生二人というクラス編成です。人数が少ないだけに、上級生から下級生まで皆、仲が良く、やる気一杯の素直な子どもたちです。こんな子どもたちと、今年もいろんなことにチャレンジしていきたいと思っています。

さて、大崎高校時代の思い出はというと、やはり部活のことでしょう。私は卓球部に所属しており、仲間と汗を流す毎日でした。体育館がなかなか使用できず、廊下に卓球台を出して練習したり、なんと体育館のステージに卓球台を持ち込んで練習したり…。雨の日には、校舎の中を行ったり来たりしてトレーニングに励んでいました。校門から出て、隣の小学校や、戸越公園の中の坂道まで、延々とランニングをしたこと等、忘れられません。途中で一ヶ所踏切があるのですが、そこで遮断機が降りていると、みんなの心の中で「休める！」と大喜びしたものでした。また、卓球部の先輩方は、とても面倒見がよくて、OBの先輩方まで来て、よく指導していただきました。卓球の技術もさることながら、高校時代には相当、筋力と根性も鍛えられたのではないかと自負しております。本当に楽しくて、充実した日々でした。

それでは、どうぞこれからも、大崎高校が益々繁栄しますよう、遠方より願っております。

49歳で工学博士に



砂永登志男（昭和39年度卒）

私は滋賀県大津市に住んでおり、大崎高校にも卒業以来長いこと出かけていませんが、毎年春になると梧桐会報が送られて来て楽しく読ませて頂いています。今回思いがけずにも、私にも何か書くようにとのご依頼があり、大崎高校時代、その後、現在など思いつくままにまとめてみました。

私が大崎高校に在学したのは1962−65年で、その後大学を出てから技術系の職業に就き、やりがいのある仕事を経験する事が出来ましたが、今振り返ってみると、理科系の科目に興味が出たのは大崎高校の時でした。成績が良かった訳ではないですが、特に数学が好きになり、今も田口先生の代数、宮本先生の幾何の授業を思い出します。宮本先生の授業は昼食後の一番眠気に襲われる時間に週2回あったようで、先生から「どうですかね？　砂永君」と質問されはっと目が覚めたのを40年もたった今でもよく憶えています。数学の次に興味が強かったのは生物で、松本先生の授業やラットの解剖などもよく思い出します。しかし、数学、生物は専攻すると職業はその当時は教職が主のように思え、先生は務まらないとの考えで、進路を決めるには最終的には物理を選び、東京理科大学の応用物理に進みました。

1969年に大学を卒業して、一年半ほど、出版社で科学技術分野の雑誌、書籍の編集の仕事をした後、外資系のコンピューターメーカーの技術者に転職し今もその会社で働いています。

入社後、2度の米国での勤務を含めてかなり面白い仕事に就く事が出来、もう一度基礎から勉強しようという思いが強くなりました。勤務先には海外留学制度があり、応募したところ運良く通り、工学系でも物理の色彩の濃いプリンストン大学の大学院修士課程に、大学を卒業してから10年目の32歳で入りました。ここでは後にも先にもこんなに勉強に没頭出来た事が無いほどの充実した2年間を経験出来ました。

1981年に大学院から会社に戻ったところ、丁度そのころ専攻した半導体物理を生かせる職場が滋賀県に出来、藤沢からそこへ転勤となり、以後今も滋賀県に住んでいます。そこでは半導体素子の研究開発、設計などを担当しましたが、自分の行ってきた内容を博士論文にまとめて、京都大学にて提出し、1996年に工学博士の学位を受けることが出来ました。なんとなく漠然と50歳までには学位と思っており、49歳というぎりぎりではありますが、一応自分なりの立てた目標に間に合いました。

妻も薬学部卒の理科系ですので、私だけの影響ではないとは思いますが、大崎高校時代に始まった私の理科好きは3人の子供達にも受け継がれているようです。長男は千葉県にある大学で生物を専攻しており、毎週日曜の夜に電話で、生物、自然科学、哲学など色々議論しあい、最近は卒業研究の進み具合を聞くのも楽しみの一つです。長女は高校生で、バスケットに夢中ですが、やはり理科系に行きたいそうで、特に今は数学が好きだそうです。先日期末試験前に、化学の授業がよく分からないので教えて欲しいと言われ、日曜の夜に3時間ほど教科書の内容の基本的な理解のしかたを説明したところ、よく分かったそうで、期末試験も大変よい成績を取ってきて、またいくらか理科好きが進んだようです。一番下の小学3年生の次女の夏休みの自由研究では、テーマ選びや、実験の手伝いをしてあげました。滋賀県の展示会で佳作をもらって気を好くして、今年もやろうと張り切っています。

私にとって大崎高校は短い三年間でしたが、その後の進路を方向付けした重みのある三年間でした。校庭が道路に引き裂かれようとそんな事にめげずこれからも発展していってもらいたいものです。

心に残る思い出と素晴らしい友に出会えた大崎高校

阿部（池田）菊枝（昭和35年度卒）

神戸に移り住んで二十七年になります。三人の子供に恵まれ、二人の娘は嫁ぎ、孫は三人おります。

〝まさか〟の地震の阪神・淡路大震災経験しましたが、食器棚の陶磁器・置物等は、見るも無残な姿となりましたが、家も家族も無事でした。最近、地球上で地震が多発しており、十年前を思い出し、心がとても痛みます。

大崎高校に在学中は、英語部とテニス部に在籍しておりました。

苦手な英語を少しでも克服できればと入った英語部です。文化祭での英語劇が心に残っています。

「クリスマス　キャロル」「シンデレラ」を放課後遅くまで、一生懸命練習したこと、衣装を手作りしたこと、英語の発音をよく直されたことなど、今では素晴らしい思い出となっています。

テニス部では、終業のベルと同時にテニスコート（名ばかりの草だらけだったように記憶しております）に一直線、暗くなるまでボールを追いかけ、テニスに明け暮れた三年間でした。その当時のテニス部の三人の友とは、OL時代は月一回会い、ショッピングやおしゃべりに花をさかせ、青春を謳歌し、楽しい独身時代を過ごしました。それぞれが結婚してからも、私が神戸に移ってからも、時々会い、親交を温めました。

ここ数年は年一回、家族のことなどを忘れ、大崎時代を思い出し、たまにテニスをしたりの小旅行を楽しんでおります。

クラシック音楽がお好きで多趣味な真貝（太田）洋子さん、毎月どこかの外国の地に居る荒川（内田）恵子さん、おさげ髪がまだまだ似合うかわいい斉藤（天野）洋子さん、これからもよろしくお願いします。

心に残る思い出と、素晴らしい友に出会えた大崎高校に感謝の気持でいっぱいです。

最後に、梧桐会の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。

真貝さん　荒川さん　私　斉藤さん

会員だより

35年が経ちました

杉山芳樹（昭和44年度卒）

私が大崎高校を卒業したのは35年前（昭和45年）で、今さらながら時の経つ早さを感じます。高校時代も大学時代も良い思い出ばかりだったせいか、大学院を修了後も学校を離れることができず、そのまま大学に教員として就職しました。11年前に岩手県盛岡市に転勤し現在に至ります。

私たちの学年は二年生の秋に修学旅行がありました。行き先は東北地方で、仙台で列車を降り、バスで青森まで北上するものでした。途中、盛岡の城址公園に立ち寄り昼食をとりましたが、その時はまさか25年後に移り住む地になるとは思いませんでした。品川区で生まれ、大田区の工場地帯で育った私にとって、東北地方の自然の豊かさは強く印象に残りました。盛岡の大学からお誘いがあった時は、修学旅行で訪れた時のイメージが大きく作用し、転勤することを決断しました。

岩手県の面積は広く、四国四県と同じです。私の住んでいる県庁所在地盛岡市は、東西南北どちらの方向へも車で30分も走れば鬱蒼とした森と天然の温泉があります。県庁所在地にもかかわらず、ビルの間を流れる川で子供が泳いでいるのを初めて見たときには驚きました。また南部杜氏の故郷だけに、市内のあちらこちらにおいしい湧き水があります。冬は寒さが厳しいのですが、春は種々の花が美しく咲き、山菜が豊富です。夏は日中は30度以上になりますが、夜は湿度も気温も低く、就寝時にクーラーが必要なのは1週間程度です。秋は紅葉がすばらしく、絵心のない私でもスケッチをしたくなる程です。こんな自然環境から、穏やかで優しく、余裕さえ感じるゆったりとした県民性が生まれるのかもしれません。

さて、大学で講義を担当するようになって久しいのですが、今なお学生の勉学に対するモチベーションを高めるのに毎日のように苦労しています。講義中に寝ている者もいますし、メールを打っている者もいます。

毎回の講義の準備には、教える側は講義時間よりもはるかに多くの時間を割いていることや、講義中の個々の学生の動向は教師には手に取るようにわかることも、学生は知らないと思います。私もそうでしたから。遅刻と欠席こそありませんでしたが、私の高校時代の授業中の態度は決して褒められたものではありませんでした。校庭越しに緑色の電車が通過するのをぼんやりと眺めることもありました。寝てることもありましたし、授業中の早弁もしました。先生方には全て見えていたと思うと恥ずかしい限りです。鷹揚な様子で授業をされていた数学の宮本先生、いつも熱のこもった話しぶりの英語の田島先生や地理の堀井先生、授業中に生徒を飽きさせなかった化学の北尾先生など、大崎高校でのなつかしい先生方も同じ苦労をされていたのではないかと思います。今となっては申し訳ない気持ちで一杯です。

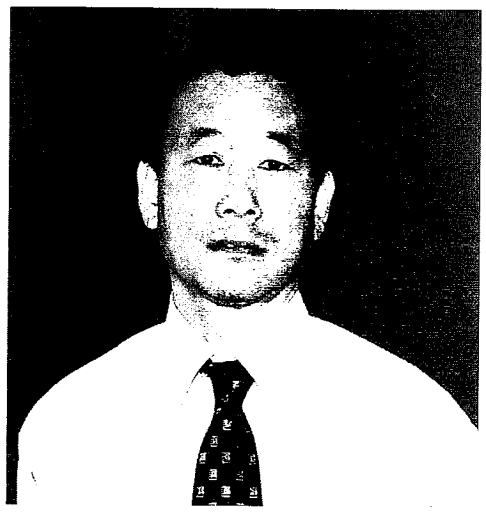
さて、職業柄、学生に接する機会が多いのですが、現在の学生の気質は私たちの頃とは大きく違います。一言で言えば私たちとは比べものにならないほど裕福に育った世代だと思います。欲しいと思えば物や情報は、いつでも、どこでも、しかも短時間で手に入る環境があります。海外へも気軽に出かけられます。若さ故の元気さもあり、学生に対し羨望の気持ちを持つこともたびたびです。ただ、すべての学生に当てはまるわけではありませんが、困難に直面した時に、まず逃げる姿勢をみせることと、女子学生に比べ男子学生の覇気のなさが気になります。

私たちの高校生活には、パソコンも携帯もコンビニもマクドナルドハンバーガーも存在しませんでした。しかし、損得感情もなく、一緒にいる時間を最優先させることを当然とし、身の回りの出来事だけでなく政治や社会問題を熱く語っても、決して白けることもない多くの仲間と過ごすことができたことだけをとってみても幸せな高校生活だったと思います。35年前、日本全体が貧しかったのですが、経済成長が著しい時期で、社会全体にエネルギーが満ちあふれ、誰しも希望が持てる時代でした。そして何よりも安全と水がタダでした。現代の高校生には物足りないかも知れませんが、私たちが大崎高校生だった頃は、今考えると、日本の歴史の中でも決して悪い時代ではなかったように思えます。

職員だより

大崎高校の思い出

旧職員　辻　忠則（社会科）（昭和59年～平成4年）



梧桐会報の職員だよりとして、原稿の依頼をいただき、私のような者が諸先生、諸先輩を差し置いて、原稿を書かせていただくことは身に余る光栄です。

きっと私にお話が来たのは、私の大崎高校での在任中が大崎高校にとって体育館落成、新校舎案計画へと激動の時代だからではないかと勝手に解釈し、当時のことを思い出して稿を進めたいと思います。

道路対策委員から　校舎改築委員に

都市計画道路26号線が通る話は、大崎高校が現在の品川区豊町に学校を移転した昭和24年頃から既にあったと聞いています。都市計画道路は戦後の東京都の交通網を整備するものとして計画されましたが、現在でも下北沢周辺のように案はあるものの、着工の目途が立たない案も多くあります。

大崎高校の敷地内を通る都市計画26号線は、大崎高校を分断するだけでなく、存在そのものを危うくする計画案でした。私が大崎に着任したのは昭和59年ですが、この計画に反対し、大崎高校を守ろうとする同窓会、PTA、在校生徒達による学校独自の取り組みが周年行事とともに、学校を一つにまとめ上げ、都市計画道路の学校敷地内の通過反対という方針を維持してきました。道路対策委員として学校の窓口となられて活躍されていたのが石岡康男先生、相原二三男先生であったと記憶しています。その流れで同じ社会科の教員が歴代、道路対策委員に選ばれました。神山久男先生と一緒に私も道路対策委員の仕事をさせていただきました。よく登下校時に道路計画に指定されている本校前から荏原警察を通り、現在の東急目黒線の武蔵小山駅までと、戸越公園から下神明、大井町までの工事の進捗状況を歩いて調べたものでした。大崎高校の存続を危うくする道路案にとって、転機となったのは、体育館、格技等の改築だと思います。老朽化の激しい体育館で昭和61年度入学式が行われましたが、この年に入学した生徒達の担任になり、生徒達との楽しい触れ合いは今も忘れられません。61年から63年までは体育館・格技棟の改修工事のため、プールもなく、劣悪な教育環境でしたが、外部の施設を借りての体育の授業やクラブ活動を乗り切ったことは大崎高校存続への伏線になったと思います。体育館・格技棟の新築により、次はHR棟の改築へと話が進みました。

HR棟建設のためには、都市計画道路26号線との共存を考えなければならなくなりました。本校正門前の道路に面した家屋が用地買収で更地が目立つようになる中で、従来の道路を学校敷地内に通さない道路対策から校舎改築を進めながら道路を通す計画を進めていく条件闘争に切り替えざるを得なくなりました。

道路対策時代は、対立していた東京都第二建設事務所との話し合いがもたれるようになったのは、昭和から平成になってからだと記憶しています。かつて大崎高校が道路反対で一致団結して戦ってきた経緯があったお陰で、第二建設事務所から大崎高校の教育環境を配慮した校舎改築案を引き出すことが出来ました。午後6時以降、本校会議室で校舎改築委員と第二建設事務所との話し合いが頻繁に開かれるようになりました。第2種住居地域や、建坪率、容積率などの用語が飛び交いましたが、幸い私の知識が生き、16パターンのモデル案を引き出し、うち3案を職員会議で紹介することが出来ました。今から思うと当時はバブル景気であり、都の予算の比較的自由であったと思います。同じように学校敷地内を道路が通るために平成13年に廃校と決まった明正高校の例を考えると大崎高校の場合は早めに条件闘争に転換したことが結果的に良かったと思います。

私の異動後は芦沢正則先生が引き継いで下さいました。7階建ての新校舎に全天候型グラウンド、そしてかつてのグラウンド内にテニスコートが誕生する大崎高校の施設は決して使い勝手の良いものではないでしょうが、生徒達が十分に利用してくれることを祈っています。

梧桐会名簿発売中

「梧桐会名簿」平成15年版を発売中です。

今年も、総会当日の会場でも販売する予定です。

発行後2年間の補訂版付です。

この機会に是非ご購入いただき、同期会や、旧友との連絡等にご活用いただければ幸いです。

ご注文には、同封の払込取扱票に**名簿希望**と書いて**お振込**みください。

1冊2,500円（送料込み）です。

お問い合わせは梧桐会事務局（右記）まで。

梧桐会事務局からのお知らせ

〒144-0054 大田区新蒲田3－18－1－507 渡部良彦方

TEL/FAX 03－3730－8117（常時留守電となっております）

E-mail: aogirikai@mbm.nifty.com（できるだけEメールをご活用下さい）

お電話で住所変更のご連絡をいただく場合、以下の項目をお願いいたします。

①卒業年度
②会員番号
③氏名（旧姓も）
④旧住所（念のため、電話では省略可）
⑤新住所（郵便番号から）
⑥(新)電話番号（こちらからご連絡することもあります）

の5点です。電話では以上のことを留守電に入れて下さい。郵便もしくはFAXの方が文字・数字に関する誤りが少ないと思いますので、よろしくお願いします。

※払込取扱票の住所・氏名・会員番号は事務局で打ち出しました。字の間違いなどございましたら、至急ご連絡下さい。5桁（旧職員は4桁）のナンバーは、会員番号です。

※最近、留守電に〝無言電話!?〟がとても多く、大変困っております。留守電に録音するのが苦手でしたら、せめてお名前と電話番号だけでも入れてください。こちらから折り返しお電話致します。

職員だより

大崎高校での思い出

旧職員　橋本　勝（英語科）
（昭和49年～54年）

突然の原稿依頼にしばしとまどっていました。昭和四十九年四月から五十四年三月までのわずか五年の大崎高校での生活であったにも関わらず、あまりにも沢山の思い出がありすぎるからです。

着任した当時は群制度で雪谷・大崎・南高校が十三群の時代でした。私自身、現在の大田区多摩川で育ち、一学区の都立高校を卒業している関係で、教員になった時から早く一学区に異動したいと願っていました。幸い、念願が叶い、自宅から三十分の通勤時間で、通勤は極めて楽になりました。その分、二十代後半という若さもあり、学校での生活を楽しみました。

強烈な印象に残っている思い出は文化祭での教員劇です。誰とはなしに、教員劇をしようということになり、国語科・渡辺修平さんの戯曲、体育科・平野稔先生の演出による「逆さ桃太郎」と題する劇をやりました。

内容は桃太郎は両親から金に糸目をつけずに購入した素晴らしい衣装を身につけさせられ、鬼が島に行ったけれど、何の功績も果たさずに戻ってきたため、両親に叱責され、弾劾裁判にかけられ、果ては桃に閉じ込められ、「葬送行進曲」と共に川に流されてしまうというものでした。

当時、「ロッキード事件」が社会を賑わしていた頃で、「記憶にございません」の言葉が流行り、この言葉を裁判にかけられた桃太郎の台詞に取り入れ、アレンジをしたことが劇を見てくださった方々に大受けしたようです。

クラスの生徒たちが会場の体育館前列を陣取り、喜んで見てくれたものの、実は恥ずかしさで一杯でした。終了後、「まともな顔で職員室に入れない」と出演した教員が口々に言っていたけれど、「楽しかったよ」と言う言葉を他の教員から聞き、ほっとした思いでした。同時に「大崎高校若者教員パワー」を発揮できたことに大きな喜びを感じた瞬間でした。

着任と同時に一学年の担任をしました、この学年は三ヵ年クラス替えをせずに入学から卒業まで過ごしました。修学旅行等のクラス写真を時折眺めては、誰が生徒で誰が担任かわからない「めだかの学校」のようなクラスでした。それだけに進路のことが気にかかっていたけれど、「橋本さんのクラスは・・・」の周囲の風評をよそにそれぞれ自分の進路を決定してくれ、救われました。まさに、「やる時はやる」という強い雰囲気のあるクラスでした。卒業後、聞いたところでは、「担任に心配をかけさせないようにしよう」という優しい思いやりがあったようです。

三年生であるにも関わらず、秋の球技大会には受験勉強をよそに、クラスが一丸となりいくつかの種目で優勝、または上位入賞を果たし、底力を見せてくれたのです。

卒業後、それぞれの道を歩んでいることをクラス会や、手紙（年賀状等）で報告してくれ、まさに教師冥利に尽きます。

その生徒たちも今では四十代後半。自己実現をかなえ、人生の真っ只中を生きているのだろうと思い、皆との出会いを不思議な縁と痛切に感じています。

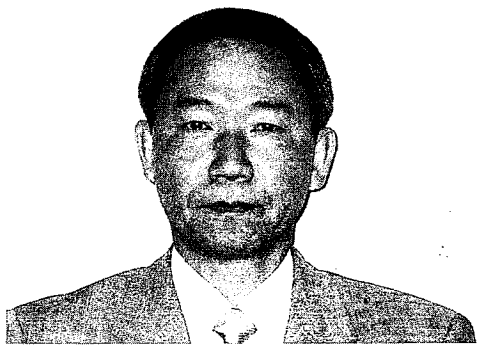
「出会い」と言えば、教育庁指導部に勤務する増渕達夫さんは、昭和四十九年からの一年間、英語を担当しました。今では仕事柄、私の方がまさに指導を受けているところです。また、蒲田高校に勤務中、理科で蒲田高校に勤務するようになった小尾敏明さんは大崎高校で一年間（昭和五十三年）授業を担当しました、今でも時折、連絡をくれるだけでなく、梧桐会報第五十号「高校のクラス会は時空を越える」と題した記事にある通り担任でもない私をクラス会に招待してくれる好青年に成長しました。担任をしていた町田敏也さん（都立高校・生物教諭）には十九年ぶりに再会。大活躍中でした。

矢作先生・島宮先生にも大崎高を出てから再会しました。お互い若い時代を大崎で過ごしたという共通意識のような懐かしさを抱いています。

私が大崎高校に勤務するようになった頃、常に二十六号線のことが話題になっていました。敷地の真ん中を道路が通るとの話には信じられないものがありました。時が過ぎ、校舎が新築されたことは話には聞いていたけれど、訪れる機会がないまま時間が過ぎてしまいました。折を見て、お世話になった大崎高校に出かけたいものです。

これまでひたすら走ってきて、あと数年で退職を迎える年齢になりました。日ごと「リヤ王」の心境に近づきつつあるようです。が、「人生六十はまだ序の口」とのこと。これからは、大崎高校での思い出を大切にしながら、ゆっくり歩いていこうと思っているところです。

教員生活のスタート



旧職員　島宮道男（保健体育科）
（昭和45年～50年）

○教員としてのスタート

昭和四十五年三月に大学を卒業した私は、就職先も決まらず、一年間の就職浪人を覚悟しておりました。そのようなとき、保健体育科の渡辺忠夫先生から電話をいただき、「四月十六日付けで大学に移る先生がいるので、非常勤講師で来ないか」と声をかけていただきました。早速、面接に行き任用されることになりました。

昭和四十五年当時の大崎高校体育科は、渡辺先生、利根川先生、篠原先生、寺口先生であり、慣れない私を温かく迎えてくださいました。また、教員としての在り方や教科指導について、公私の別なく厳しくも温かくご指導いただきました。私が今日あるのもこのときのご指導の賜と感謝いたしております。

四月十六日から勤め始めてまもなく、渡辺先生から、七月の臨時採用試験を受けるように言われ、猛勉強をした結果合格し、九月一日付けで大崎高校教諭として採用となりました。

○始めての担任

昭和四十六年四月に入学してきた生徒の担任となり、教諭として日が浅い私にとって、行き当たりばったりのクラス経営が始まりました。2年の時の修学旅行は萩・津和野・広島でしたが、生徒が作った班別行動計画を忘れ怒られる始末でした。でも、私にとっては初めての担任であり、思い出に残る生徒達でした。

数年前に、クラス会を大崎高校の近くで催し、久しぶりに懐かしい顔に出会いました。その後も連絡を取り合っております。

○紛争のこと

最近は記憶が曖昧になってきておりますが、たしか四十八年だったでしょうか。定時制から端を発した紛争が、外部からの支援者も交え全日制まで飛び火してきました。校門を入って右側の方で、テントを張ってハンガーストライキが行われ、全日制生徒も生徒心得の見直しを教員に迫るなどの事態に発展しました。教員側と生徒側との話し合いがもたれ、双方の歩み寄りにより事態が収拾したものと記憶しております。

私の学生時代も、大学紛争の名残があったのですが、当事者として関わって良い経験となりました。

○近況

大崎高校の後、三鷹、南野、成瀬、松原（定）、都大附属、千歳、明正と異動し、現在は新設校である芦花高校におります。

大崎高校在職時は、まだ、大学を出たばかりであり、体が良く動き、スタミナも十分ありました。しかし、現在は退職まで三年をきる歳となって、二ヶ月に一度くらいのペースでゴルフを楽しんでおります。また、温泉とサウナが大好きで、体のメンテナンスに勤しんでおります。

そろそろ退職後のことも考えなければなりませんが、仕事に追われそれどころではない日々を送っております。

○最後に

伝統ある大崎高校で、私の教員生活がスタートできたことを大変誇りに思っております。

今後とも大崎高校のますますのご発展と梧桐会会員の皆様のご健勝を祈念して、結びとさせていただきます。

〈教師〉になれた喜び

旧職員　網谷　厚子（国語科）
（昭和59年～平成5年）

すでに私は教頭・副校長となって八年目を迎え、何人もの新採の先生の面接をしているが、この人たちも

昭和五九年三月、当時の中島実校長先生から突然電話をいただいた。大崎高校に採用面接に来ないかという電話であった。私は、大学院の修士課程を修了し、さらに博士課程にすでに四年も在学し、「貧乏学生」であることに心身共に疲れ果てていた。初めて受けた採用試験。採用面接の電話を諦めかけていた矢先であった。本当に嬉しかった。当時の教頭先生は星利美先生であった。あの時の「面接」を、教員生活二二年目に入る今でも鮮やかに覚えている。

また、〈教師であることの畏れ〉をいつまでも持ち続けてもらいたいと願っている。

私は大崎高校で本当の〈教師〉になれたと思っている。昭和五九年は、定年制がしかれる一年前。大崎高校に三十数年、親子を教えたという先生が何人もいらっしゃって、昔の〈権威ある〉都立高校の教師といった風情を漂わせていらっしゃった。国語の故矢野志津先生は詩人でもあったが、自然の多く残る校庭の薔薇や他の花々の手入れを元気にされていた。

初めての担任は生徒たちが二年生の時から、二度目の担任は新入生の時からやらせていただいた。失敗をしては、多くの先生方の厳しいご指導をいただいていた。〈挨拶〉の仕方まで教えていただいた。〈学生っぽい〉青臭い教師で、〈詩〉を書いていること、〈研究〉し続けていることを隠さなかった。国語の教師は文学少女崩れと言われるが、私はいつまでも創作し続ける教師であることをやめたくはなかった。今年六冊目の詩集を思潮社から出版する。

大崎高校では文芸部、陸上部の顧問をした。創作への情熱を持つ生徒たちとの交流は、私の大切な生きる〈糧〉でもある。今の勤務校小笠原高校でも、「総合的な学習の時間」を受け持ち、小笠原文芸クラブを立ち上げ、すでに二冊の雑誌も出した。大崎高校では「We are」という雑誌を文芸部で出版し、彼らが卒業後も雑誌を出したりしているのを聞くと私は嬉しい。文芸部のみんなとは、今でも時々会ったりしている。最初に担任した生徒も三十代半ばとなり、父親・母親にまでなっているのを知ると、年月の速さを痛感する。元気な声を時折電話で聞かせてくれたり、お手紙や葉書で近況を報せてくれたりすると、私はたいした担任ではなかったけれど、〈教師〉であって良かったとしみじみ思うのである。

大崎高校では、生徒とのつき合いも〈長く〉なっているが、当時共に勤めた先生方や事務職員の方々との関係も〈長く〉なっている。自分が第二の〈青春時代〉を送った学校というだけではなく、一生役立つ、何か〈大切なものを学んだ場所〉でもあるからなのだろう。職場の人々と心から〈笑ったり〉〈悲しんだり〉せっかく教師になれたのに、辞めてしまいたいとまで思ったこともあった。そんなこんながたくさん詰まっている高校である。私にとって第二の〈卒業校〉でもあると思っている。

現在、竹芝桟橋から南に千キロメートル彼方の小笠原諸島で唯一の〈都立高校〉小笠原高校の副校長をしている。生徒数今年度三三名（定員六十名）、どの子も本当にかわいい。私は〈学校〉という場所がとても好きである。子どもたちのたくさんの〈希望〉をかなえるためこれからも頑張りたいと思う。

編集後記

◇4月22日㈮午後6時20分。昨年より一日遅い。しかも、母の日は一日早い。ということは、二日遅れ。やばい、配達までに母の日は過ぎてしまうのか？　過ぎてしまっては困る。でも、今年は会長の原稿も入っているし、ん？写真がまだか？　まあいい。明日は幹事会だ。

◇やってしまった。遅れに遅れた原稿依頼。何人かリストアップして原稿用紙を送った。そして戻ってきた。ずいぶん早く書いてくれたな、と思い開封。ガ、ガ、ガーン、「去年も書きましたので…」というお手紙。やってしまった。リストアップの仕方がマンネリ化しているのだろう。そして確認を怠った。ゴメンナサイ。以後気をつけます。そして…続きがあるのだ。締切日を過ぎて、お決まりの催促の電話をした。夜9時台。二、三人お風呂に入っていますとのこと。いや、そんなことはどうでもいい。その中のお一人、「三年くらい前にも書きました」。「エッ？」またまたやってしまった。どうしてかなあ？　でも、快く書いていただきました。ありがとうございました。「編集長失格！」「編集長および編集委員急募！」

◇それにしても、女性が多いこの梧桐会。しかし今年は男性が多い。まあ、たまたまこうなっただけのことですが…。たまたまといえば、やはり三年くらい前の「夫婦（＋親子）同窓生の特集」の時にご紹介したお嬢さんが今春卒業され、なんと新幹事となっています。期待しています。

◇あいかわらず野球のコーチを続けています。今年、息子（6年生）が背番号「1」をつけました。息子の頑張りを見て、「俺も」と思うのですが、自分が思っていることと体の動きとが一致しません。誰が見てもそうみたいです。

◇Eメールを活用しましょう。現在のところ幹事会の出欠ばかりで使っているのが現状です。住所変更や、梧桐会に対するご意見・ご希望など、何でも結構です。原稿依頼にも使いたいのですが、とりあえず郵送で依頼し、できる限りメールで原稿を送っていただくという体制にしていきたいと思っています。

◇今年の梧桐会総会も、昨年と同様、新校舎の光の庭で開催予定です。昨年はあいにくの雨で（当日はふしぎにあまり雨は降らない）隣の食堂を利用しましたが、なかなかいい場所です。お誘い合わせのうえご出席ください。今年も母の日、待っていますよ。（なべちゃん）